

【出席者（50音順、敬称略）】

岩本宏成
（京都府自動車車体整備協同組合副理事長）

斎藤和実
（日本自動車車体整備協同組合連合会教育委員長）

杉山裕二
（現代の名工）

永縄俊裕
（ボデーリペア技術研修所講師）

増田智秀
（日車協連高度化技能講習インストラクター）

【司会】

長谷川明憲
（本誌）

特集

インストラクター座談会・鈑金編

技術者育成



の鍵は

「技術者の早期育成」と「継続的な知識・技量の向上」は、自社の売り上げ増や作業品質の向上に直結する。その指導のコツを探るべく、10月某日、プロトリオス大阪本社に鈑金技術の指導に長けた5人に集まってもらい、座談会を開催した。現場での指導におけるポイントや留意点について、最新の車体構造事情や多様化する現代の人材事情を交えながら、語り合ってもらった。

（構成：渥美紅里）

技術習得の第一歩と目安

――鈑金技術指導の方法について。特に経験の浅い若い技術者に対して、まず何から指導するのか

杉山　私の経験では、まず「教える人の目線に立つ」ことが最も重要だ。以前、東南アジアから来た研修生を教えたことがある。最初は日本の自動車専門学校の卒業生と同じレベルで進めていたのだが、途中から彼らの表情が曇り、理解できていないことが分かった。そこで、もっと基礎的なレベルから教え直したところ、ようやく理解が進んだ。

研修では経験年数もバラバラなので、どこから始めるべきかを確認し、それぞれのレベルに合わせることが不可欠。また、アジャスターを教育した経験からも、レベルの高い人が自分の目線で資料を作るのではなく、学ぶ側のレベルに合わせなければ伝わらないことを痛感した。だからこそ、まずは「鈑金塗装とはどういう仕事で、何が目的なのか」を、その人の目線に合わせて明確にするところから始めるべきだと考えている。

斎藤　「何から指導するか」というよりは、相手が「何を教えてほしいか」が重要だ。そこで自社では、まったくの未経験者には、数ヵ月間脱着作業を通じて修理の全体像を学んでもらう。その後、本格的な鈑金の指導に入るが、その際、今一番多い修理パターンであるスタッド溶接機での引き作業から教える。それと並行して、熱をかけることのリスクなども伝える。また、鈑金の花形はハンマリングだと思うので、スタッド作業の合間に自主練習という形でオン・ドリーの叩き方を練習させる。

ただし、最近の若い人は時間外の自主的な練習を嫌う傾向にある。そこで、時間外労働の強要によるパワハラにならないよう、業務時間内に1時間、私が直接教える時間を設けるようにした。

岩本　本当に何の知識もない人であれば、まずはケガをしないように道具の使い方から教える。どう使えば安全で、どう使えば危ないか。たとえば、スパナをグーで握って押せばケガをするので、パーで押すようにといった基本的なことだ。

また、道具を正しく使えなければ技術も習得できない。この段階で、その人が器用かどうかもおおよそは見抜けるので、そこからは個々のレベルに合わせた指導をしていく。

増田　まず「原理・原則」という学びの土台から教える。具体的には、鈑金



Iwamoto Hiroshige

岩本宏成 氏

京都府自動車車体整備協同組合副理事長、岩本自動車工作所（京都府京都市）代表

1979年生まれ。自動車車体整備士の養成やハンダ鈑金などの講習会の講師に加え、金属塗装主席検定員も務める。指導時のモットーは「個々のスキルを見極めてそれぞれに似合った指導をする」



Saito Kazumi

斎藤和実 氏

日本自動車車体整備協同組合連合会教育委員長、優流会長、ラーニングストリーム代表取締役（両社とも東京都八王子市）

1975年生まれ。自動車3級整備士や車体整備士の講師、日車協連の高度化車体整備技能講習インストラクターを務める。指導時のモットーは「受講者と同じ目線、言葉を選ぶ」、「脇の知識（雑学）などを話に取り込み、飽きさせないようにする」

における「足し算と引き算」である。

この基礎は、経験の有無にかかわらず共通プログラムとして全員に学んでもらう。たとえば、パネルを叩いて延ばすことを「足し算」、熱を加えて絞ることを「引き算」と捉え、鉄板に何が起きているのかを頭と体の両方で理解してもらう。

ただし、講習では基本的に受講者自身に仮説を立ててもらい、実験・検証を通じて答えを発見してもらう。「発見する楽しさ」が次の学びへの意欲にもつながるからだ。たとえば、「30cmのパネルを30℃加熱すると0.1mm伸び、それによってパネルは約3mm反る」といった現象も、実際に数値を測りながら確認する。そして、その後の反復訓練によって、理論を感覚として身に付けてもらう。

さらに、問いかけを通じて本人に考えさせ、知識を「言語化」させることを大切にしている。言語化できれば、その技術は後輩にも伝えられる。「見て覚えろ」の時代は終わった。学んだことを理解し、言葉にして次の世代に伝えていく。そのための最初のゴールとして、目の前の損傷を正しく分析し、自分で考えられる力を養うことを重視している。

永縄　まったくの初心者には、まず「鈑金塗装とはどんな仕事か」という全体像から話す。工場で行われている一連の作業を、テキストを見せながら説明し、仕事内容を理解してもらう。

私自身が教わる側だった時は、「見て覚えろ」の世代で、何をやっているのかすら分からなかった。そうした経験から、順を追って説明することの重要性を感じている。

そして、ある程度習得した人は、必ず失敗するポイントが出てくる。だから、「これはやってはダメ」、「ここは特に気をつけて」という注意点を1つか2つ、必ず伝えるようにしている。その一言があるだけで、大きな失敗を防げるし、言われたことは記憶に残りやすい。この一言を添えてから実際の作業に取り組んでもらうことが、上達への近道だと思う。

――感覚的な側面が強い鈑金作業を指導する上で、目安や指針、あるいは最終的な仕上がりの基準はどのように設定しているか

岩本　口では伝わりにくいので、できるだけ数字に置き換えるようにしている。たとえば、ペーパーを当てるにしても、番手を具体的に指示する。また、手の感覚が鈍い人には、パテを研ぐ際にガイドコートを塗り、凹凸を目で見て分かるようにする。

このように、一人ひとりの特性に合わせて、視覚的な情報を活用したり、数値を明確にしたりと、その都度やり方を変えている。